

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】 丹羽 宣子

【所属】(助成決定時) 一橋大学大学院 社会学研究科

【研究題目】

女性僧侶とジェンダー ―日蓮宗女性僧侶の「法華経」の語りに着目して―

【研究の目的】

報告者の研究目的は、日蓮宗女性僧侶の宗教意識および宗教実践にみられるジェンダー問題を、実証的資料収集に基づいて考察することである。

仏教と女性の問題に関しては多くの研究が行われてきたが、教義学的もしくは歴史学的なものが圧倒的に多い。近年、当事者である女性仏教徒に着目した研究もいくつかなされるようになってきたものの、その数は限られており、多くは男性僧侶の配偶者をめぐる問題に焦点化したものである。もう一方の当事者である女性僧侶の研究は管見の限り殆ど見当たらない。日本仏教界におけるジェンダーの問題を考えるためには、女性僧侶たちの実態解明が急務の課題といえる。

本研究では、女人成仏思想を提示し両性平等的とされる法華経を根本教典とする日蓮宗を事例として取り上げ、法華経解釈を女性僧侶たちがどのように語るのか、その語りと寺院生活での実際はどのような関係にあるのかに着目することで、女性僧侶の実態の把握を目指した。

【研究の内容・方法】

(1) 女性僧侶に関する言説の整理

女性僧侶の実証研究が乏しい現状においては、その実態に迫ろうとするならば、まずは彼女たちの自伝などに頼るしかない。そのため、女性僧侶の自叙伝、手記、日蓮宗女性教師の会の会報、「日蓮宗全女性教師アンケート報告書」などから、彼女たちの活動や直面している問題の把握を試みた。また、既存研究や文書記録での女性僧侶の記述のされ方の検証も行った。これらをふまえ、教義学上の問題としてだけでは回収し得ない女性僧侶のアクチュアリティに迫る意義を確認した。

(2) インタビュー調査とフィールドワーク

日蓮宗女性僧侶たちの宗教実践の現場に内在しつつ、彼女たちの仏教理解の解明に努めるために、ライフヒストリー法に基づくインタビュー調査と、フィールドワークを実施した。

予備調査では、女性僧侶たちは自らの宗派の素晴らしさとして、日蓮宗の宗制には性差別的な文言は書かれていないことや、法華経の示す平等思想を強調していた。しかし一方で、2004年に日蓮宗現代宗教研究所が作成した「日蓮宗全女性教師アンケート報告書」には、「仏教界では女性は劣位におかれ、男性優位の世界といえます」、「(女性の)役割は正しく評価されていませんし、具体的に検討されたこともありません」との批判

も掲載されている。このような複雑な状況を理解するためには、質問紙調査による統計分析ではなく、各々の人生や経験をより詳細に聞き取る必要があると考え、本研究ではライフヒストリー法に基づくインタビュー調査を実施した。

また、法話や、種々の活動へのフィールドワークも実施した。仏の教えを分かりやすく信徒に話す場では、その思想が女性僧侶の経験や想いと混ざり合いながら豊かに語られるためである。法話のフィールドワークは都市と地方の2寺院で行った。その他に、安産祈願や子どもの発育祈願などにも参加し、若い母親やその家族へかける言葉に注目しながら調査を行った。

【結論・考察】

研究計画時の予測とは異なり、女性僧侶の法華経の語りは、解釈よりも、絶対的な心の拠り所ともいうべき象徴としての語りが圧倒的に多かった。この点を修正し、分析を進めていきたい。

ジェンダーの問題については、感情労働(emotional labor)に関する議論を参考に、女性僧侶の疎外と戦略を考察した。多くの女性僧侶の語りからは、自らには聖職者に相応しい役割期待の遂行と感情管理が求められているだけでなく、親しみやすさや聞き上手等の「女性ならではの」役割が期待され、その遂行に意義を見出していることが確認できた。しかし、女性性が強調された感情労働の遂行は性差の固定化を招きかねない。例えば、ボランティア活動について男性僧侶は「僧侶ならではの」と語る一方で、女性僧侶の多くは「女性ならではの」という語りを經由する。とはいえ、これは自分の資源を最大限に活用する男性優位の世界を生き抜くための戦略という側面もあろう。一部の者はこのことを自覚しつつ葛藤している。今後は彼女たちに着目し考察を深めていきたい。